

# ロボットの表象

—— 文学作品に登場するロボットへ与えられる性別について ——

岩 本 侑 一 郎

## はじめに

カレル・チャペック『RUR』から多くのロボットが多様な媒体の作品で描かれてきた。その中で度々出てくるのが美しい女性型のロボットである。人に似せてロボットを作る以上どちらかの性別に外見が寄せられるのは不思議なことでは無い。しかしロボットに美しい女性の外見を与えることは、本来性別のないロボットに性別という属性を意識して付け加えていると言えるだろう。ロボットを美しい女性として扱うというのは文学史上何度も繰り返されていると同時に矛盾をはらんだことでもあるのだ。

ロボットに与えられた性別をどう捉えるかというのは今でも解決していない問題である。

例を挙げると、二〇一四年一月号『人工知能』の表紙に掃除をする女性型ロボットが描かれ物議をかもした。掃除をする女性ロボットは「女性蔑視」であるという批判が出たのである。人に使役される存在というイメージのあるロボットと男性に従属的というステレオタイプな女性観が重なったことが批判の発端であると思われる。

現代において美しい女性型ロボットは実用的かはともかくとして実現可能な領域に踏み込んでいる。近い未来そのようなロボットが一般的なものになった時、彼らの性別についてどう向き合うべきなのか。それを考えるうえで、今まで多様な媒体の作品で描かれてきたロボットの在り方を追うことは有用な材料となるだろう。

本稿ではこのロボットと性の問題について、おそらく最初にこの問題に踏み込んだ作品である海野十三の「十八時の音楽浴」を起点として論じていこうと思う。

## 一 各作品についての個別分析

### 一 一 「電波嬢」から「十八時の音楽浴」まで

まず「美しい女性型ロボット」が日本の文学作品に登場した早い例は、井上晴樹三によるとロボットを人を模した機械とすると一九二四年に発表された延原謙による「電波嬢」<sup>四</sup>と思われる。これには鋼鉄、ゴム、電線などから出来た無線操縦の出来る美しい女性型

ロボットが出てくる。この作品は「電波嬢」という題名の時点でも分かるようにロボットに女性という性別を与えている。この作品は自身の目で原文を確認できなかったため正確なあらすじは紹介できないが、海野十三の言によればある博士に造られた美しい女性型のロボットが、その助手によって操られ人間離れた腕力や数々の仕掛けによって大暴れするが最終的には操縦者ともどもつかまり解体されてしまうという内容であるらしい。

海野は「電波嬢」の挿絵を描いており、その造形を「世にもまことに麗しい妙齡の夫人の容貌を備え五」と評していることから「十八時の音楽浴」におけるロボット描写の下地のひとつになった可能性は高い。

もう一つ「十八時の音楽浴」に影響を与えた作品として考えられるのは一九二七年にベルリンで公開され二年後日本でも公開された映画『メトロポリス』である。海野は『メトロポリス』について次のように述べている。

「独逸映画『メトロポリス』には、ブリギッテ・ヘルム扮するところの可憐なるロボットが製造せられるがこんなに美しいロボットは実在しない。

あの映画が、東京の邦楽座に出たとき、築地小劇場の連中が、「メトロポリス」の実演をやった。そのとき沢山の美しいロボットが、短い労働服で出てきて、点々として器械的に働いていた。その瑞麗にして無感情な顔や、柔らかそうな白い二の腕や、短いパンツの下から、ニュッと出ている恰好のよい脚などは、——勿論、本当の女優さんの方の演出であるが——「魂のない人間」に

扮しているだけに、非常に蠱惑的なものがあつた。屍姦だとか、人形を弄んだりする人達の気分が、なんだか判るような気がしたことである。五

ここから分かるのは海野十三が美しいロボットが創作の世界に登場することに一歩引いた視点を持っていたことである。美しいロボットを見た感想で屍姦や人形を弄ぶ人の気持ちに共感を示すのは、彼自身はロボットに性別を与えることがそれらに近い倒錯的な嗜好だと思つていたといえる。しかし『メトロポリス』によつて性別を持つたロボットという存在に共感を得たことも読み取れる。この体験がなければ美しい少女の姿を持つたロボットの登場する「十八時の音楽浴」という作品は生まれなかつたのではないだろうか。

そして一九三七年、海野十三の「十八時の音楽浴」が発表される。「十八時の音楽浴」はミルキ国という架空の国を舞台とするSF作品で、ミルキ国は「音楽浴」によつて人間の精神をコントロールし、統治している。それが音楽浴の開発者であるコハク博士をミルキ国王が謀殺したことにより統制に綻びが生じ、突如現れた宇宙人の襲来により国家は完全に瓦解する。その後、殺されたと思われたコハク博士が現れ多数の美しいロボットを従え宇宙人を撃退し、新たなロボットの国家を建設するところで終わりを迎える。

この作品には前述の通り美しい女性型のロボットが登場する。これははじめに言ったようにロボットという性別のない存在に女性という属性を付与する矛盾に海野も陥つたということではおそらくない。

理由はこの作品は性別というものを重要な要素として取り扱つて

いるからである。まず人間の性別については、ミルキ国では国民に音楽浴による抑圧の反動によって男性が女性に、女性が男性へと性転換する手術が流行している。また女学員バラが女性型のロボットのアネットに同性愛的な感情を抱いていることが描写され、それを知った夫のベンは女性化した友人のポールと結婚の話をつけにこうとする。このように人間の性別が曖昧なものとして描かれている。

次にロボットについて、この作品のロボットの象徴的な存在であるアネットは美しい少女の姿をしている。地の文でも少女と称され国王であるミルキも彼女に対して「好色な喜びをあげつばなしにして」おりロボットでありながらも女性として作中で見られているように思える。しかし海野がアネットを美しい少女の外見を持つていても女性とは別であると位置づけていることがわかる描写がある。ミルキはアネットに「人間として未完成な部分を発見した」とある部分だ。明言はされていないが女大臣アサリがアネットを「こんな女の出来損なひ」と言っていることからこれは性器のことを指していると思われる。

このように人間の性差が曖昧になりロボットも外見は女性でも女性とは言えずかといって男でもないという存在として描かれる。物語の終盤では女大臣アサリが音楽浴を常にかけることにより国民を完全にコントロールしようとするのであるが、そうやって操られる人々はまるでロボットのようである。まるで部品を交換するような手軽さで性を変えていき、音楽浴に操られる人間は作中でロボットとの同一化がされていると言える。

ロボットに性器がないのは本来性別がなく、生殖の必要もないのだから当然である。「電波嬢」のロボットも『メトロポリス』のロボ

ットにもなかっただろう。しかしそのことをあえて描写することに意味がある。

それは美しいロボットという、ある種の性的魅力を備えたロボットの存在を肯定しつつも、それは人形愛、死体愛好に近い感情であつて女性と同一視はしないという作者の立場の表明である。実際作中でもアネットは人の言葉に対して極めて薄い反応しか返さない人形のような一面——作中では「白痴美」とも表現されている——があり、女大臣アサリに殺され文字通りに死体を晒す場面で、アネットは「やや蒼ざめてはいたが、何にもしらぬ気につこりと微笑んでいた」と生前とほとんど変わらぬ表情を見せる。

海野のとつたこのような立場はロボットと性の問題への一つの答えである。

## 一—— 『鉄腕アトム』の女性的な身体表象

手塚治虫は「リボンの騎士」や「どろろ」などにおいて女性でありながら男としてふるまうといった両性具有のテーマについて幾度も扱った。

「鉄腕アトム」のアトムは少年型のロボットで本人もそう自覚している。性別のないロボットに両性具有というのは矛盾しているかに思えるが、男性でも女性でもあるというのはロボットの男性でも女性でもないという特徴に極めて近い概念といえるだろう。

アトムはもと「お色気たっぷりな美人のル」女性ロボットだったのが少年誌へ連載するにあたって少年のロボットへと設定が変更されたという。しかしロボットにとつて性別が女か男かというこ

とは文字通り設定以上の意味を持たないものである。事実としてアトム顔は女性的でまっげも長く、女性型から少年型へと設定を変えるときに髪形や服装などの細かなディテールを除けば基本的な造形は女性型をそのまま引き継いでいるように見える。手塚治虫の描いた「ブラック・ジャック(ブラック・ジャック)」「アトム鉄腕アトム」「写楽保介(三つ目が通る)」「サファイア(リボンの騎士)」を見比べる限り、でもアトムの目の形は成人男性でも少年のものでなく、少女として描かれた目に類似性がみられることが分かる。アトムの造形について漫画家の永井豪は手塚治虫と下記のようなやり取りがあったと述べている。

あるとき、『鉄腕アトム』の話になって、手塚先生が「実はアトムって、女の子のつもりで描いたんですよ」と仰って、「えーっ!!」と驚いたら、「だから、赤い靴履いてるでしよう?」と。面白いわると、アトムってかわいいし、エネルギー注入の仕方でもキワどいですよ(笑)。それは冗談としても、昭和二、三十年代という時代を考えると、少年誌で少女が主人公というのは、やり辛かった面もあったようです。それでも女の子を描きたかった手塚先生が考えたのが、少年の姿をした女の子だったというわけです。だから、アトムは敵に対してさえ徹底的に優しく、これだけ多くの人の心をつかんだんだと思います。二

このやりとりが本当なら手塚はアトムが設定変更され少年のロボットとして生まれ変わった後も、依然として女のロボットとして描いていたことになる。更に前述のアトムの造形に残るいくつ

もの女性的特徴は決して設定変更の名残ではなく意図的なものであるということにもなる。

手塚がアトムを女の子のつもりで描いたまま設定だけ変えるという力業を行ってまで女性型ロボットを描こうとしたのにはそれほど拘りがある部分であったということだろう。手塚が女性型ロボットを描くのはアトムが初めてではない。一九四九年、「メトロポリス三」という作品のミッチイというロボットである。設定では男にも女にもポタン一つで変えられる能力を持つが外見は美しい少女のものである。また、「火の鳥三」においてもロボットが美しい女性に見える男の話を描くなど手塚はロボットに女性という属性を度々付与している。アトムに限った話ではなく、手塚にはロボットと女性に何か不可分のつながりを見出していたのではないだろうか。

手塚は女性型のロボットについて「男の心の中に自分が征服したい女性像があるわけ。それはロボットだとしやすいでしよう、いうことを聞くんだから九」と述べている。これは序論で挙げた人工知能学会の表紙の問題にも通じる。女性型ロボットには男の願望が反映されている場合が多々あるということに手塚は自覚的であった。その上でアトムの性格の特徴を見てみると、アトムは基本的に人間に従順で作中で四部垣などのいじめっ子にいじめられても力に訴えることなく耐えていることが多い。そして永井豪も言うように心優しい性格で手塚の言う「征服したい女性像」を反映しているように思える。ロボットに男に都合のいい女性像が反映されていることを自覚した上でその通りの特徴を備えたロボットを描くことの意味はなんだろうか。少なくとも手塚自身の「征服したい女性像」というものがそのまま反映されているとは考え難い。

ここで「鉄腕アトム」の連載当時の読者側の科学に対する印象に目を向けたい。当時は、科学万能時代と呼ばれる、科学技術が万能の道具であるように広く大衆に思われていた時代である。しかし手塚自身はそういった科学技術観は持っていなかったことが「アトム」だって、よく読んで下されば、ロボット技術をはじめとする科学技術がいかに人間性をマイナスに導くか、いかに暴走する技術が社会に矛盾をひきおこすかがテーマになっていることがわかっていただけたと思います<sup>一四</sup>という発言からわかる。

だがSF作品を描く上で読者側の持つ科学技術観というものを切り離すことはできない。なぜなら、伊藤憲二が述べるように「その時代において人気が高かったということは、その時代の科学技術観をある程度反映するものであった可能性が高く、また広く行き渡ることによって、その時代の科学技術観を形成する役割を果たしたとも考えられるからである。とりわけ、サイエンス・フィクションの著者は、読者の科学技術観に敏感であると考えられる<sup>一五</sup>」からである。「鉄腕アトム」<sup>一六</sup>「赤いネコの巻」冒頭にてヒゲオヤジと作者の手塚治虫の会話する場面があり、ヒゲオヤジに未来都市や風景が当時と変わらないことについて文句を言われたのに対して作中の手塚は「ほんとの未来都市を描くと今の読者にとって風変わりすぎて読んでてもなじまないんだよ。だからあちこちに現代のものをまぜて読者に親しみをかんじさせるようにしてあるんだ。ここがSFマンガのむずかしい所さ」と答えている。このように手塚も読者の視点というものをSF作品を描く上で多分に意識していたことがわかる。よって手塚は「鉄腕アトム」を描くに踏まえて当時の科学万能という読者の科学技術観を取り入れたうえで科学技術の非万能性という

作者自身の科学技術観を描こうとしたのだと考えられる。

「鉄腕アトム」での科学の象徴とは当然アトムである。よってアトムには科学の万能性と非万能性を同時に内包させられている。その為に必要なであったのがアトムに含まれる女性という属性だったのではないだろうか。

アトムは優しい心と人間以上の力を持ち読者が想像する科学技術の万能性が表現されている。そして科学の万能性を表す上で重要なのがそれらの力が人間の制御下にあるということである。そこにアトムの持つ女性的な要素が重なってくる。あくまでステレオタイプな女性観ではあるが女性に対して弱い立場で従属的であるというイメージが存在する。この男性と女性の関係が人間とロボットの力関係を暗示している。

もうひとつ、科学の非万能性も女性というものに関わっている。

山田夏樹は「女性の身体は、神話から近代科学に至るまで父権的言説の中で創られてきた、いわば人工のものであり、その上で「不完全」なもののみなされてきた<sup>一七</sup>」と述べロボットと女性の身体の人工性と不完全性を共通点として挙げた。アトムを作中の科学の象徴としてみならずならば、アトムの女性として描かれた身体の不完全性は科学の不完全性——非万能性——と対応していると言える。

手塚治虫にとってロボットに女性という属性を与えることは思い通りになるものという、読者の持つ科学技術観と、万能ではないものという、作者の持つ科学技術観を融合させるための手段だったのではないだろうか。

## 一三三 「ボッコちゃん」

「ボッコちゃん」は一九五八年に同人誌『宇宙塵』の二月号に掲載された、星新一によるショートショート作品の一つであり、ボッコちゃんという名前の美人のロボットが登場する。これはバーのマスターが趣味で作ったロボットで出されたお酒を飲むことと相手の言葉を反復するだけの簡単な受け答えしか出来ないのだが、ボッコちゃんをロボットとは知らないバーの客の人気を集めるようになる。そんな客の一人がボッコちゃんにほれ込むが所詮相手はロボットであり彼の恋心は成就しない。バーに通う金にも困窮した男はこれで最後とボッコちゃんへ渡す酒に毒を入れ飲ませる。しかしボッコちゃんが飲んだ酒は足元のプラスチック管にたまるだけの仕組みで、男が去った後バーの店主はその酒を閉店前に客に振る舞う。その結果バーの店主と客の全員が毒により死んでしまうという結末になっている。

ボッコちゃんがそれまでの性別を与えられたロボットと違うのは、バーのマスター以外からは完全に人間の女性として扱われていること、そしてその構造は最も単純であることだ。

ボッコちゃん目当てに客がバーに集まる様子は男性が望む女性像というものを皮肉っているようにも思える。また創作に出てくる美しいロボットというものは大抵が科学者によって作られてきた。それをロボットの生みの親をバーのマスターという一般人に格下げしロボットの構造も限界まで単純化している。そこまでロボットというものを単純化して残ったのは客の男たちの理想の女性を投影される偶像的な存在であるということに今までの作品に登場してきた

美人ロボット全体をも皮肉っているとれる。

そういった美しいロボットが内包する要素の核だけを残したようなボッコちゃんが最後に間接的とはいえ製作者のバーのマスター含めた店内の人間を皆殺しにしようという結末は興味深いものである。ただこれをロボットと反逆という要素に分けるとこの二つはなじみ深いものだ。ロボットという語の初出作品である『R.U.R.』はロボットが各地で反乱を起こし人類が滅びる結末を迎えるし、ロボットについて語られるときよくあげられる作品『フランケンシュタイン』も造られた人間である怪物が創造主の科学者に反逆する物語である。「ボッコちゃん」はロボット作品のお約束といったものをあえて踏襲している作品なため、そういった要素も含ませたのだろうと思われる。

ボッコちゃんは「あらゆる美人の要素をとり入れたので、完全な美人ができた」と描写される。これは外見についての描写だが、後の「若いのにしっかりした子だ。べたべたお世辞を言わないし、飲んでも乱れない」と、客から内面までも評価されている。実際はお世辞を言わないのではなく言えない、飲んでも乱れないのはロボットだから当然である。このような見ようによってはロボットゆえの欠点ともとれる部分も女性として好ましい部分だと思われるのだ。これを仮に欠点の美化と呼称する。この欠点の美化はなにも「ボッコちゃん」に限った現象とは限らない。二節でも述べたいわゆる女性型ロボットの持つ「征服したい女性像」としての側面である。二節ではこの側面を一般大衆の持つ科学技術観である科学の万能性に対応する要素として挙げた。科学の万能性はポジティブな意味を持つ言葉だが、それと対応している「征服したい女性像」

は男性側に都合のいい価値観の産物であり決していい意味とは言えないだろう。この二つを同系統の要素として対応させていることは欠点の美化と捉えることが出来る。

こうして見るとボッコちゃんは今までの節で出てきたロボットの中で最も機械的で人間から遠いが作品としては最も人間の女性という側面を重要視している。アトムは女性の要素をあくまで作者と読者の科学技術観の差を埋めるための手段として利用していたに過ぎなかった。しかし『ボッコちゃん』にみられる欠点の美化は、作中の客の男性の理想とする女性像はボッコちゃんにとつては機能の欠落に過ぎない。全てを分かっている読者の視点からはボッコちゃんに熱を上げる客が滑稽に映るだろう。だが彼らが夢中になっているボッコちゃんの姿は戦前の男性社会で根強かったステレオタイプな女性像の体現なのである。戦後になり法の下の平等が保証された『ボッコちゃん』発表当時の一九五八年にあってもまだ女性の社会参画は敷居が高く、女性は戦前と大きく変わらないイメージが持たれていたことだろう。星新一はロボットに取って女性という属性を付与して、読者の視点からはそれを滑稽なものに見せた。そうすることで当時持たれていた女性へのイメージとそれを問題にしなかった社会の在り方を風刺したのではないだろうか。だからこそ今まで取り上げた作品の中で唯一ボッコちゃんが作中人間として周りから扱われていたこともロボットではなく女性の立場やイメージというものをテーマにしていると考えれば納得のいくものである。ボッコちゃんにはロボットに女性という属性を付与したというよりも、当時の女性像を表すために、女性にロボットという属性を付与したというほうが近いかもしれない。

## 二 各作品の統合的な分析

### 二一 ロボットに与えられる性と男性的役割

一章では主にロボットを人間より弱い立場の存在として位置づけ、ステレオタイプな女性観との一致について論じた。しかしロボットとは人間より弱い立場だからと言って人間より能力において劣っているとは言い切れない。むしろロボットのほうが秀でている部分が設定されている場合が多い。

女性ロボットであるならまず容姿。女性ロボットは美しい容姿を与えられているのが一般的である。一章で最初に触れた「電波嬢」もそうであるし、「十八時の音楽浴」のアネットは作中で「その裸女は、年の頃は十七八歳でもあらうか。牛乳を固めたやうな真白な艶のある美しい肢態をもつてゐた。ことに人目を惹くのは、その愛くるしい顔だった。世界中探しても二人とはゐないほどの美少女だった。どこやらミロのヴィナスに似てゐたが、寧ろそれより天使に近かったといった方がいかもしれない」と描写される。世界に二人としない美少女で、天使に例えられるということはつまり人間の限界を超えたほどの美しさであることだろう。「鉄腕アトム」のアトムは設定上は少年ロボットということもあつてか外見の美しさに言及されることはないが、手塚の構想段階で女性ロボットだった時は「お色気たつぷり」の女性的魅力を多分に備えたキャラクターであることが示唆されている。「ボッコちゃん」は一章でも引用したように「完全な美人ができた」と描写されている。

作中の描写からロボットは人間以上であると示唆される場合も多い。アトムは単純なところでは少年漫画という媒体もあってか十萬馬力の力を持っていたり、空も飛べ、聴覚などの感覚器官も人よりはるかに優れた描写がある。単純な力比ではどうあっても人間ではアトムに勝てないだろう。

「十八時の音楽浴」のアネットは意外にもミルキ国王の愛人の女大臣アサリによって具体的な描写もなくあっさり殺されてしまう。しかし最後に「アネットに似た人造人間が、無慮五百體」登場し、自滅した人間に代わり宇宙人の襲来を退けるのである。アトムのよくなわたりやすい特徴はないが、人間がコハク博士以外死に絶え、人造人間の国が出来た結末から作品内ではロボットが人間より優秀だったから成り代わったととらえることもできる。

ボッコちゃんは作中で「頭はからっぽに近かった」と言われる通り人間以上のことはほとんどできないにも関わらず結末で間接的とはいえ店内の人間を皆殺しにしてしまう。この作品が最も婉曲的だが結果的に普通の人間には到底できない大事をやったのけたのに変わりはない。

女性は男性と比べて少なくとも肉体の強度においては一般的に劣っている。また歴史上でも女性の立場が弱かった時期もあり女性には男性と比べて弱いといったイメージがある。そういったか弱さのイメージを持つ女性の外見を持ちながら男性以上のことをやってのける美しい女性型ロボットには日本の主にサブカルチャーにおいて発展してきた戦う美少女というモチーフと同一の発想の起源があるのではないだろうか。

戦う美少女の存在する作品として有名なものは「セーラーMoon」

や『風の谷のナウシカ』『エヴァンゲリオン』などがある。斎藤環は日本の戦う美少女像について「無垢さや可憐さなどの「少女性」(必ずしも「処女性」とイコールではない)が、ほぼ完全な状態で維持されている。二〇」と述べる。そしてそれが本来「ローティーン」までの少女たちが同一化するためのアイコン」であったが今は「戦う美少女」を「セクシユアリティの対象物」とみなす「おたく」と呼ばれる消費者集団が存在すると語っている。一章に取り上げた三作品では「戦う美少女」という概念は存在しないか、手塚治虫の時代まできてやつと「リボンの騎士」が登場した程度である。

戦うという男性的な要素を女性に行わせるというのはいかにも矛盾している。今でこそ少女が戦闘するということに少なくとも創作の世界では珍しくもない現象になった。女性の社会参画も進み男女に出来ることの差がなくなってきたこともあってか大した理由づけもされなくなっているが、初期の作品である「リボンの騎士」ではそうもいかない。主人公のサファイアは男性の心と女性の心を併せ持つ男装の麗人という特異な設定が与えられた。

こういった理由付けが女性型ロボットには必要ない。いかに美しく少女のような体躯であつても根本的に性別がないことは読者にとつては共通理解として存在する。であれば「十八時の音楽浴」のように人間に代わって国を支配したり、「鉄腕アトム」のように十萬馬力の力で戦つたり、「ボッコちゃん」のように大量殺人を犯すことになつても「女性らしさ」という社会通念には捉われない。戦うに限らず女性という属性を持たせた存在に男性的な役割を持たせる時にロボットという設定は都合のいいものだったといえる。



## 二二二 ロボットへの性的魅力の描写

次は一章で主要に取り上げた「十八時の音楽浴」「鉄腕アトム」「ポッコちゃん」の違いに着目しつつロボットと性別に関する描写の變化を探りたい。

これらの中でロボットに対する性的魅力の描写を最も明確に行っているのは「十八時の音楽浴」である。女性のロボットを裸体で登場させ直接的ではないにせよ性器の有無にまで触れている。

「鉄腕アトム」は設定上は少年なため中でアトムが美しいロボットであるとかいった扱いはされない。しかし手塚がアトムを女の子のつもりで描いていることを踏まえるといくつか注目すべき点がある。まずアトムが半裸であることだ。これはアトムが身体的には少女として描かれていると考えるとかなりあからさまな表現である。また、一章に引用した永井豪の「エネルギー注入の仕方でもキワどいですよねー」という言葉だが、この「キワどい」とされるエネルギー注入の仕方とはお尻からエネルギーを補給することなのである。これらの表現を仮に女性ロボットで行えば当時の基準でもまず許されなかっただろう。むしろ手塚はアトムが設定上は少年ロボットだからこそあえて踏み込んだ表現に手を染めたのだろう。これを子供向けの少年漫画という媒体に掲載したという点では「十八時の音楽浴」以上に大胆なロボットに対する性的魅力の表現を行ったといえる。

最後に時代的にも一番後期の「ポッコちゃん」であるが、「完全な美人」であるとは書かれているものあまり性的魅力を匂わす表現はされていない。理由として考えられるのは星新一の作風として性

的な表現をあまり行わなかったことである。これは星の作家としてのポリシーのようなものであったらしく一九五七年の彼の銀行手帳に「自己バクロコソ サツカ 性的ミリヨクガ ナイノデ ウイツットで惹きつける」との書付がある。

三作品のロボットの造形には「ポッコちゃん」にのみ該当する特徴がある。それはポッコちゃんだけが同じ女性でも大人の女性の姿をしたロボットであることだ。作中、年齢については「美人で若くて」「若いのにしつかりした」などただ若いとしか言われないが、ポッコちゃんは酒を飲む機能があり、客からもバーの「新しく入った女の子」として受け入れられていることから、成人女性に見える外見をしていることは推測できる。

少女の姿に性的な魅力を感じるといえるのはアンモラルなこととして文学ではしばしばテーマに取り上げられる。例えば一九〇七年に発表された田山花袋の「少女病三」がそうである。作中には中年の作家が名も知らぬ娘に性的魅力を感じてあれこれと妄想を巡らせる場面がある。少女と性的魅力の関係は日本で戦う美少女が発展する数十年前から存在はしていたようである。

海野十三がそう扱っていたようにロボットへの性的魅力を感じることは倒錯的嗜好の一種である。海野が影響を受けたと思しき作品、「電波嬢」は「妙齢の夫人の容貌を備え」ている。映画の『メトロポリス』のマリア兼アンドロイド役のブリギッテ・ヘルムは映画出演当時二十歳で少女と言っても良い年齢ではあるが、ドイツ人の彫りの深い顔立ちが日本人から見ても少女に見えるに似ていた可能性があり、そうでなくともアネットは「年の頃は十七八歳」と外見年齢を

描写されておりブリギッテ・ヘルムよりさらに若い。ロボットの性的魅力を表現する時に、それをアンモラルなことであるとより強調するために少女の姿を海野は取らせたのだろう。

そして手塚もロボットに少女の姿を持たせることに対して同様の考えを持っていたと思われる。手塚は一九四九年「メトロポリス」という作品を描いておりこれが前述した映画の『メトロポリス』から何らかの影響を受けていることは間違いない。なぜなら手塚の「メトロポリス」でもロボットであるミッチイは少女の姿を与えられているからである。

星新一は彼のポリシーに従ってロボットの性的表現を排除した結果、ロボットを少女として描く必要性もなくなった。それがボッコちゃんの造形が成人女性となった理由といえるだろう。また、第一章で述べたように社会の女性の立場というものもテーマに組み込まれていたため、現実で社会に出る女性の年齢に合わせてボッコちゃんの年齢を設定したこともあるだろう。

## 二二三 ロボットの無垢性

第二章第一節で戦う美少女は無垢さや純真さといった少女性を残しており、それがセクシュアリティの対象になっていることを引用した。私はこの無垢さや純真さというものがロボットの特性に近しいものであると考える。「十八時の音楽浴」のアネットは人語を解さず話しかけられてもここにこと笑うだけでその様子を「白痴美」と称される。ミルキ国王の喜悅、その愛人アサリからの嫉妬という悪意を向けられても気づきすらしめない彼女の幼児のような精神性は

「無垢」と言い換えられるだろう。「鉄腕アトム」のアトムは、というより作中のロボット全般に言えることであるが、作中のロボットは問題なく完成すれば善性の心を持つように作られているのである。「フランケンシュタインの巻」のフランケンシュタインは製造工程を全てロボットに任せてしまった為に「いい心」を植え付けられずに完成してしまい、悪事に手を染めるロボットとして出てくる。逆に言えばそういった異常が起らない限り作中のロボットは悪い心を決して持てないのである。構造的に不変の「いい心」を持つ、これもある意味で無垢や純真さを約束されていると言える。上記二作ではいずれもロボット、少女、純真または無垢という三つの要素が備わっている。

そしてこれは現代人のロボットに対する認識の話であるが、現代人はロボットを信頼している傾向がある。石黒浩は以下のように述べている。

しかし僕はここでひとつ問題にしたいことがある。人々がロボットに対して抱いている「嘘をつかない」とか「指示に従えば問題ない」という先入観についてである。今のところ嘘をつくロボットや、嘘をつく自動販売機はないと信じられている。(中略)

日本人の対ロボット意識に至っては、『鉄腕アトム』や『機動戦士ガンダム』のおかげなのか、はたまた宗教意識が希薄だからなのか、ロボットに対する嫌悪感がない。むしろロボットは万能、まちがえないという意識が強いので、全面的に信頼している。三

これはあくまで現代人の感覚なので本稿で取り上げている一九五

○年代前後の人々の意識とは異なるかもしれない。だが科学万能時代が過ぎ去った現代ですらこういつたロボットの認識が残っているのである。「鉄腕アトム」のような作品は当時の人々の認識を補強したに過ぎず、人々には元々ロボットや科学に対する万能性という認識や信頼があったものと考えられる。手塚治虫も当時の人々のそういった認識があったからこそアトムに科学の万能性と非万能性を併せ持つ要素として女性という属性を付けたのだろうということは一章でも述べた。

当時から人々はロボットは信頼できるものという認識があった。それはロボットが人間の言いなりになるもの、人間に対して悪心を抱かないものだと思っているからだろう。ロボットと反乱のテーマは創作では頻出するテーマではあったが人々の科学技術観を大きく変えるには至らなかった。人々の中でロボットは今も昔も嘘をつかない無垢な存在であったのだ。

### 三 ロボットという種族

三章では今までの考察から得た情報、結論を通してSF作家はロボットをどのように見て、描こうとしていたのか。彼らに共通した思想とはなんだったのかについて論じたい。

ロボットとは非成長の存在である。彼らの身体は人工的な物で、金属やバネで構成された身体が成長することは当然ない。山田夏樹は鉄腕アトムの元となった「アトム大使<sup>三四</sup>」を例にしてアトムの非成長性についてこのように述べる。

物語は、宇宙人が「きみのかおをさんこうにしておとなのかおをつくりました。きみもいつまでも少年でいてはいけません。こんどあうときはおとなどうしであおう」という言葉とともに「おとなのかお」をした頭部を贈り、アトムに「成長」を促す場面を幕を閉じる。(中略)「おとな」になる＝「おとな」の頭部を付ける、という直結からもわかるように、その身体はあくまで記号以上のものではなく、「成長」可能とする身体性が発生していないのだ。

一七

これはアトムの精神の非成長性についても言える。アトムが大人か子供かを大人の頭部という外見のみで決定するというのは彼の内面、精神の成長を最初から無視しているからである。

しかし個々の作品では成長性を持たないロボットも、作品をまたいでそのあり方は変容してきた。「十八時の音楽浴」でのロボットは自発的な行動をほとんど取れず自意識らしきものも薄弱で「白痴の唾女」と作中で言われるような様子であった。そして最後まで結局はコック博士という人間に操られる道具であった。

「鉄腕アトム」になるとロボットは自分のはつきりとした意思を持つ。だがそれでも彼らにはわるい心を持つことが出来ない。これは一見利点のようにも思える、しかしそのいい心とかわるい心を定めているのは作った側である人間なのだ。善悪を自身で選べないまま画一的な価値基準をあらかじめ埋め込まれている以上、ここでもまだロボットは人間の手の中、無垢な少女のままであるには変わらない。しかしアトムは同じ作品内でも精神性的な変化が描かれる。「青騎士の巻」にて反旗を翻すロボット集団が登場し、アトムもそれに

同調していくのである。最終的にはアトムは人間側に立つて戦うの  
だが少なくとも選択の機会は与えられたといえるだろう。

そして「ボッコちゃん」でロボットは大人へと姿を変える。この  
作品では逆にロボットから知性がほぼ奪われている。だが「十八時  
の音楽浴」のように人間の支配下には戻らない。ボッコちゃんは相  
手の言葉に同調するだけの機能しか持たない。それゆえに話しかけ  
る男たちはボッコちゃんに理想を投影し理想の女性だと思ひ込む。

しかしボッコちゃんの同調の言葉は全て心にもないことである。「鉄  
腕アトム」のロボットには彼らの持つていい心ゆえに同じこと  
は言えなかっただろう。それでもボッコちゃんは相手の理想に一〇  
〇%沿うことはできない。だからこそボッコちゃんの態度に不満を  
持つて殺そうとまでするものが出てくるのである。そしてここでも  
「十八時の音楽浴」とは展開が違う、アネットはアサリによって抵  
抗もなく殺されたが、ボッコちゃんは相手の望む通りに毒を飲んだ  
うえで殺されず、逆に殺人を犯す。

SF作家たちはなぜロボットに無垢で純真な少女の属性をまず与  
えたのだろうか。SF作家はロボットというものをSFの世界のみ  
の存在ではなく、いざれあらわれる新しい種族のようなものと認識  
していたのではないだろうか。ロボットとは科学の急速な発展によ  
って新しく出てきた可能性である。言葉自体は『R.U.R.』が発表さ  
れた一九二〇年からあったし、似たような概念はそれ以前からあっ  
たかもしれない。だがそれらはまだその時点で現実的なものではな  
かったのである。しかし海野十三に連なるSF作家はロボットを現  
実的な可能性として見た。

ロボットを新しい種族として考えると、彼らは最初は生まれたば

かりで種として未熟、それゆえ未成熟な少女の姿と無垢な精神性を  
与えられたのだろう。そして海野十三の時代、手塚治虫の時代、星  
新一の時代、それぞれでSF作家はロボットという種を成長させて  
きた。人間の支配下で主体性を全く持たないアネット、人間への恭  
順と反抗という選択を与えられたアトム、人間の支配下にあると思  
わせておいて最も明確に人間へ反抗してみせたボッコちゃん。どの  
作家も科学が人類に与える危機について書いていたことには変わら  
ない。しかしその危機についてのロボットの占める割合は徐々に上  
がっていった。

そうして様々な作家が自らの作品を通してロボットという種族を  
成長させ、成熟させてきた。そして現代、現実にはロボットという人  
種が生まれてもおかしくないまでに科学は発展した。それでも現代  
の人々はロボットに対して大きく信頼を置いている。女性の姿をし  
たロボットを人間の女性と同一視して女性蔑視と取ってしまうこと  
もロボットを将来的に生まれ得る新たな種族だとは現実的に認識し  
ていないからかもしれない。ロボットという種族が現実にはどのよう  
な成長を遂げるかは分からない。だが「十八時の音楽浴」のアネッ  
トのように無垢に過ぎる少女だといつまでも認識していると、「ボッ  
コちゃん」のように気づかない間に悲劇を生むことになるだろう。

- 一 Karel Capek 『R.U.R.』一九二〇年
- 二 海野十三 『十八時の音楽浴』『モダン日本』一九二七年四月
- 三 井上晴樹 『日本ロボット創世記』NTT出版、一九九三年二月
- 四 延原謙 『電波嬢』『無線電話』一九二四年八月
- 五 海野十三 『人造物語』『新青年』一九三二年四月
- 六 手塚治虫 『リボンの騎士』『少女クラブ』講談社、一九五三年一月
- 七 手塚治虫 『じろろ』『週刊少年サンデー』小学館、一九六七年八月
- 八 手塚治虫 『鉄腕アトム』『少年』光文社、一九五二年四月
- 九 手塚治虫 『虫られつ話』潮出版社、一九八一年四月
- 一〇 手塚治虫 『ブラック・ジャック』① 秋田書店、一九七四年五月、表紙、手塚治虫『手塚治虫文庫全集 鉄腕アトム』講談社、二〇〇九年一月、表紙、手塚治虫『手塚治虫文庫全集 リボンの騎士』① 講談社、二〇〇九年十月、表紙、手塚治虫『手塚治虫文庫全集 三つ目がとおる』① 講談社、二〇一〇年二月、表紙
- 一一 永井豪 『鉄腕アトムは女の子だった』『文芸春秋』二〇一三年一月
- 一二 手塚治虫 『メトロポリス』育英出版、一九四九年九月
- 一三 『火の鳥』『漫画少年』学童社、一九五四年七月
- 一四 手塚治虫 『ぼくのマンガ人生』岩波書店、一九九七年五月
- 一五 伊藤憲二 『エフ氏』と『アトム』と『ロボット』の表から見た科学技術観の戦前と戦後 『年報 科学・技術・社会』科学社会学会、二〇〇三年六月
- 一六 手塚治虫 『手塚治虫文庫全集 鉄腕アトム』① 講談社、二〇〇九年一月
- 一七 山田夏樹 『ロボットとジェンダー』『昭和文学研究』二〇〇六年九月
- 一八 『ボッコちゃん』『宇宙塵』一九五八年二月
- 一九 臼田昭記 M.W.シェリー 『フランケンシュタイン』国書刊行会、一九七九年一月 Mary Wollstonecraft Godwin Shelley 『Frankenstein; or The Modern Prometheus』 Harding, Mavor & Jones' 一八一八年
- 二〇 斎藤操 『戦闘美少女の精神分析』太田出版、二〇〇〇年四月
- 二一 最相葉月 『星新一 一〇〇一話をつくった人』新潮社、二〇〇七年三月
- 二二 田山花袋 『少女病』一九〇七年
- 二三 石黒浩 『アンドロイドは人間になれるか』文芸春秋、二〇一五年二月
- 二四 手塚治虫 『アトム大使』『少年』光文社、一九五一年四月